名古屋外国語大学論集　第5号　2019年7月

論　文

『小約翰』（魯迅訳、望・藹覃著）に関する覚え書（上）

关于《小约翰》（鲁迅译，望・蔼覃著）的札记（上）

中井政喜
Masaki NAKAI

1. はじめに
2. 『小約翰』について（以上、今号）
3. 魯迅の『小約翰』翻訳について（以下、次号）
4. さいごに

1．はじめに

『小約翰〔小さなヨハネス〕[1]』（魯迅〈1881～1936〉訳、望・藹覃〈Frederik van Eeden〉著、未名社、1928・1）は、『魯迅訳文全集』第3巻（福建教育出版社、2008・3、小論はこれを底本とする）の注記に次のように説明されている。

「『小約翰』　象徴的写実的な長篇童話詩、オランダの作家ファン・エーデン（1860～1932）作。原作は1887年に発表され、魯迅は1926年7月に翻訳を開始し、8月に訳し終わる。1928年1月、北京の未名社が出版し、〈未名叢刊〉の一冊になる。本書の本文その他の各篇は、『引言』を除い

Das litterarische Echo

（図1）
『Das litterarische Echo』第1巻第21期（1899年8月1日）、巻頭の複印

て、すべて刊行物に発表されたことがない。」[2]

「引言」(1927・5・30)[3]において、魯迅は詳細に『小約翰』を翻訳した経緯をのべている。

「私のあの『馬上支日記』〔1926・7・6、『華蓋集続編』所収〕には、次のような一節がある。

『中央公園に着き、人の少ない静かな約束のところへと真っ直ぐに向かう。寿山〔斉宗頤(せいそうい)、寿山は字(あざな)、1881～1965〕は先にすでにきており、少し休息して、《小約翰〔Der kleine Johannes〕[4]》を相対して訳しはじめる。これは良い本であるが、しかしそれを得たのは偶然のことである。大体20年前になるだろう、私は日本の東京の古本屋の店頭で数十冊のドイツ語の文学雑誌を買った。その中にこの本の紹介と作者の評伝があった、というのもそのときやっとドイツ語に訳されたばかりであったから。おもしろいと思い、丸善書店に頼んで買った。訳したいと思ったが、その力がなかった。後にいつも思ったが、しかしいつも別の事情に引き離された。去年〔1925年〕になって、やっと夏休みにそれを訳し終えようと決心し、そして広告を出したが、はからずもその夏休みはほかのときと較べてもいっそう困難であった。今年また思い出し、頁をくって目をとおしてみると、難解なところが少なくなく、やはりその力がなかった。寿山に一緒に訳してくれるかと尋ねたところ、彼は承諾し、それではじめた。そしてこの夏休みに必ず訳し終わろうと約束した。』」(5頁)

(図2)
「Frederik van Eeden. von Pol de Mont」の第1ページ目(1322段)の複印

「引言」はさらに、1926年7月、翻訳を開始したときの上の説明に加えて、重ねて詳細な事情を述べていく。

「これは去年、すなわち1926年7月6日のことである。それで、20年前とはもちろん1906年である。いわゆる文学雑誌とは、『小さなヨハネス〔小約翰〕』を紹介しているもので、1899年8月1日出版の『文学の反響』(Das litterarische

Echo）であり、現在はおそらく旧派文学の機関誌になっているであろう、しかしその一冊はまだ第1巻の第21期であった。[5]原作の発表は1887年で、作者はわずかに28歳である。13年後になって、ドイツ語訳本がやっと印刷された。〔ドイツ語への〕翻訳の完成はその前であった。中国語に翻訳されたのは発表のちょうど40年の後で、彼はすでに68歳となっている。」（5頁）

（図3）
「Frederik van Eeden. von Pol de Mont」の第2頁目（1325、1326段）の複印

魯迅は、1906年、丸善に依頼し、フレス女史の訳筆によるドイツ語訳本を手に入れることになる。

「たまたまその中に載せられた『小さなヨハネス』訳本の見本を見た。それは本書の第5章であり、非常に惹きつけられた。数日後、南江堂へかけつけて買おうとしたが、この本がなかった。また丸善にかけつけても、なかった。やむなくドイツへの注文を丸善に頼むほかなかった。大体三ヶ月後、この本は果たして私の手もとに届いた。フレス女史（Anna Fles）の訳筆で、巻頭にはラシェ博士（Dr. Paul Raché）[6]の序文があり、『内外国文学叢書』（Bibliothek die Gesamt-Litteratur des In-und-Auslandes. Verlag von Otto Hendel, Halle a.d.S.）の一冊であった。[7]値段はただの75ペニッヒ、私たちの4角で、しかも布装であった。」（6頁）

（図4）
「Aus dem “Kleinen Johannes”. von Frederik van Eeden」（1332段）、第5章冒頭部分の複印

しかし翻訳の着手は、魯迅のドイツ語の語学力の不足によって、なかなかできなかったと言う。

「しかしなぜ早くに着手しないのか。〈忙しい〉とは、口実である。大きな原因は分からない箇所が依然としてたくさんあったことによる。読んでいくとすでに分かったようであるが、しか

し筆を執って訳そうとするときになると、また疑問が湧いてくる、要するに、外国語の実力が不充分であった。」(7頁)

「一昨年〔1925年〕、私は夏休みの時間を利用し、一冊の辞典に頼ってこの道を通り抜けようと確かに決心したのだが、思いがけないことに時間がなかった。私の少なくとも二、三ヶ月の生命は、〈正人君子〉と〈学者〉たちの包囲攻撃のうちに亡くなった。去年〔1926年〕の夏になって、北京を離れようとし、先ずまたこの本を思い出し、長年ともに仕事をしてきた友人、かつて私が『工人綏恵略夫〔労働者シェヴィリョフ〕』を訳すのを手伝ってくれた斉宗頤君とともに、中央公園の赤い壁の一室に隠れて、まずは草稿として訳した。」(7頁)

約一ヶ月ほどで、二人は苦労しながら翻訳の草稿を作った。

「私たちの翻訳は毎日午後であり、必ず欠かせないのが身近に良い茶葉の一瓶の茶と、身体の大汗だった。ときには早く進み、ときにはひどく論争し、ときには相談し、ときには誰も適当な訳し方を思いつかなかった。翻訳して、めまいがし目がかすむときには、小窓の外の陽と緑陰を見て、心がようやく落ち着き、ゆっくりと高い梢の蝉の声を聞いた。このように大体一ヶ月たった。」(7頁)

「まもなく私は草稿をたずさえて厦門大学に行き、そこで暇をつくって整理したいと思ったが、しかし時間がなかった。また留まることができなくなった、そこにも〈学者〉がいた。そこでまた広州の中山大学にもっていき、そこで暇をつくり整理したいと思ったが、しかしまた時間がなく、しかもまた留まることができなくなった、そこにもまた〈学者〉が来た。その結果それをもって自分のすみかに——借りたばかりで一ヶ月たたない、広い、しかし暑い建物——白雲楼に逃げ入った。」(7頁)

(図5)
「Der kleine Johannes」、1892年版の表紙

魯迅は、1926年7月6日から、斉宗頤（寿山）とともにドイツ語訳本から『小さなヨハネス』を訳しはじめ、同年8月13日に草稿にしあげた。[8]魯迅はこの草稿をもって、同年8月27日に北京を発って厦門大学の任につき、またその草稿をもって、1927年1月に広州の中山大学に赴任する。『小さなヨハネス』出版のための草稿の整理は、1927年5月2日に着手し、本文の整理を5月26日に終える。[9]また、5月29日に「原序」（パウル・ラシェ著）を訳了し、31日に「引言」を書き、おそらく6月14日以前に「拂来特力克・望・藹覃」（波勒・兌・蒙徳〔ポル・デ・モント〕著）を訳し、6月14日に「動植物訳名小記」を書き終え、全書の整理が完成した。[10]

『小約翰』をめぐる問題について、すでに「象徴主義と魯迅訳『小さなヨハネス』」（工藤貴正、『魯迅と西洋近代文芸思潮論』〈汲古書院、2008・9・25〉所収）等の先行論文において、諸側面からの検討がなされている。[11]とりわけ「象徴主義と魯迅訳『小さなヨハネス』」（前掲）は、厨川白村論、「鋳剣」論と連関させながら、詳細緻密な検討がなされている。

この小論の目的は、『小約翰〔小さなヨハネス〕』の翻訳に関する魯迅の意図を、魯迅を取りまく当時の社会的政治的状況、および魯迅自身の思想的心理的状況に焦点をあて、解釈を試みることにある。当初、魯迅が『小約翰』を知ったとき、心を引きつけられた理由よりも、[12]次の点に重点を置いて追究する。1926年7月に、魯迅は、なぜこの翻訳の全体に正式に着手したのだろうか。なぜ翻訳草稿の最終的整理が1927年5月ころに行われ、1928年1月に出版することになったのだろうか。それは、魯迅自身が言うように多忙であったこと、また語学力の不足の点等が主要な原因であったと思われる。しかしその他の原因となる要因はなかったのだろうか。すなわち小論の目的は、先行論文を参照しつつ、魯迅を取りまいた状況とそこか

Der kleine Johannes
von
Frederik van Eeden.
Autorisierte Übersetzung aus dem Holländischen
von
Anna Fles.
Mit einem Vorwort von Dr. Paul Raché.
Halle a. S.
Verlag von Otto Hendel.

（図6）
「Der kleine Johannes」、
1892年版の中表紙

ら生じる魯迅の思想的心理的状況という視点に基づいて、自分なりの推測を若干提出することにある。[13]

2.『小約翰』について

2.1 『小約翰』のあらすじ

以下にあらすじをやや詳しく紹介する。第1章から第14章までである。『小約翰』の理解には細かなニュアンスを含む文脈の紹介が必要と考え、以下の「あらすじ」は本来のあらすじの範囲をはるかに超える紹介となる。しかしこれだけ冗長な紹介であるにもかかわらず、内容は難解で、しかも私の主観による選択が免れていないことをお断りしなければならない。

（第1章）（約3頁）

語り手は、この物語が童話のようであるけれども、しかしすべてのことはかつて実際に起きたことであると言う。

小さなヨハネスは大きな庭園のある古い家に住んでいた。そこにはたくさんの暗い道、階段、小さな小屋、大きな倉庫があり、庭園にはいたるところ保護のための塀や温室があり、池や砂の丘があった。これらがヨハネスの世界である。夕日が落ちていくと、西の空に雲が積み重なり、洞窟の門のようになって、そこから赤い光が射しでた。ヨハネスは考えた。「あそこに飛んでいくことができるだろうか。」（16頁）「あの後ろはどうなっているのだろうか。将来ほんとうに、ほんとうにあそこに行くことができるのだろうか。」（同上）ヨハネスには最愛の父と、犬のプリストーに、猫のシーモンがいた。ヨハネスは学校の友達といるよりも、プリストーといるほうがよかった。父は聡明な優しい人で、いつも散歩にヨハネスをつれて外に出た。ヨハネスは父に尋ねる、世界はなぜこのようなのか、現在のような様子なのか、どうして動物や植物はみな死ななければならないのか、等々と。

（第2章）（約10頁）

夕日が落ちるころ、ヨハネスはプリストーを乗せて池にボートを漕ぎだ

す。西の空に、光の洞窟の深いところを見て、「今、羽で、あそこに行こう！」（18頁）と思う。そのとき、大きなトンボのような羽をもち、小さな、すらりとした姿で、青い服を着て、金髪の上に白い昼顔の冠をのせた旋児〔男の子の妖精〕が現れる。今日は彼の誕生日で、太陽が父であり、月が母である、と彼は言う。ヨハネスは、落日の紫の光が黄金の雲の門から射しでるところを指さして、「僕をあそこに連れて行くことができるかい」（20頁）と言う。旋児は、「今は駄目。」「僕自身もこれまで父のところへ行ったことがない。」（20頁）と言う。旋児はヨハネスの額に口づけすると、ヨハネスは植物や動物の気持ちと言葉がわかるようになり、また身体も小さく軽く変わった。眠るプリストーを残して、彼らは陸に上がり、コオロギの学校を見学する。教師のコオロギは、地理、植物学、動物学の授業をし、動物学では人類が役立たずで有害な、進化の最も低い段階の動物であると教える。丘にある野ウサギの巣に入ることを野ウサギに求めると、今晩は彼の巣で慈善事業の儀式があると言う。近くに人間の住居ができ、犬を連れてきたため、野ウサギ7匹が犠牲となり、鼠、タルバガン、ヒキガエルが大きな被害を受け、その遺族が会を開くと言う。蛍が巣穴の道案内をし、今日は妖精の王様が出席されていると言う。旋児はヨハネスを王様に引き合わせた。王様は首飾りから小さな金の鍵をはずして、ヨハネスに手渡した。王様は言う、「この鍵はおまえの幸福となることができよう。」（24頁）「これで金の小箱を開けられる、そこには高貴な至宝がしまわれてある」（同上）。誰がこの箱をもっているかは、教えることができない。ただ、熱心に探さなければならない。もしヨハネスが、王様と旋児に長く友人でありつづけ忠実であるならば、成功するであろう、と王様は言った。慈善会の舞踏が始まり、ヒキガエルやトカゲたちの踊りを見て、ヨハネスは笑ってしまう。進行係からヨハネスはきついおしかりを受けて、旋児とその場を抜けだした。巣穴の道案内をした蛍は、婚約者を人間にさらわれたという傷心の身の上話をする。悲嘆に暮れる蛍は、この空虚な生活から離れることを願っていると言う。ヨハネスと旋児は疲れて、野ウサギの柔らかな毛に寄りかかりながら眠る。

（第3章）（約7頁）

翌朝、ヨハネスは丘の上でプリストーに舐められ、起こされる。昨日の夜のことは、夢だったのだろうか、旋児はどこにいるのかと思う。ヨハネスは握りしめた自分の手を開くと、背筋から足の先までぞっとした。黄金の小さな鍵が光っていた。「プリストー、これもやはり本当のことだった！」（29頁）家の者はヨハネスの行いをきつく叱ったけれども、ヨハネスは旋児との友情を守るために、強情を押しとおした。父は言った、「それじゃ、この子に任せよう、これはあまりにきつすぎた。きっと何か不思議なことに出会ったのだろう。将来きっと話してくれる時があるだろう。」（29頁）ヨハネスは部屋に戻ると、カーテンのひもを切り、鍵を胸につるした。ヨハネスは学校の授業で、太陽が男性であり、「彼女」〔オランダ語では女性名詞〕ではなく「彼」だと言ったため、教師から罰を受け、一文を百回書くように命じられる。ヨハネスがひとりで教室にいのこり、25回目を書いていると、子ネズミが机に跳び上がって、旋児の伝言を伝える。太陽が父親であることは、人類には関係のないことだから、ヨハネスが罰を受けるのは当然だ、と。子ネズミは、ネズミ族の経験から、人とは驚くほど劣悪で野蛮なものだと言う。ヨハネスは鍵を丘に埋めて隠すようにと子ネズミからアドバイスを受ける。ヨハネスがシャツの着替えをしなければならない前夜に、旋児が訪れ、二人は鍵を埋めるために丘へむかって空を飛んで行く。途中コガネムシとぶつかり、それで旋児は土からでてきたばかりのコガネムシの話をする。コガネムシが空へはじめて飛び立ったところまで話して、続きの話は次回にすると言う。二人は丘の斜面のバラの咲くところに行き、丘のバラの根元に鍵を埋め、見張り番をバラに託した。

（第4章）（約9頁）

ヨハネスは、夏の日、倉庫の窓から遠い丘をながめた。鍵を埋めた金曜日の夜から、3週間がたったが、ヨハネスは旋児を見かけなかった。一群の鳩が空を舞い、突然ヨハネスの窓辺に舞い降り、一羽の鳩が赤い羽根を与えた。ヨハネスは鳩ともに飛び立つ。高い菩提樹の梢で、旋児が待ちうけ、ヨハネスは

ともに生き物の世界を遍歴することになる。ミソサザイの鳴き声を聞き、旋児は、ミソサザイがもともと天国の鳥であったのだが、羽の黄色を変えたために、天国を追われたと言う。或る言葉がその羽の色をもとに戻し、ミソサザイを天国に帰らせることができる。しかしミソサザイはその言葉を忘れてしまい、毎日試しているのだが、うまくいかないと言う。ヨハネスはまた小さい体で、苔の林を歩く。そのうちに蟻の橋につき、蟻の巣を見る。年とった蟻は、彼らが平和的な蟻であって、ちかぢか戦闘的な蟻の一族を襲い殲滅する準備をしていると言う。また、蟻の歴史を紹介して言う。蟻はこれまでいつも戦争をし、戦争が絶え間なかった。平和を唱える蟻がいたが、みんなはこれをかみ殺した。しかしこのような平和を唱える蟻が増え、かみ殺す仕事があまりにも忙しくなったため、かみ殺していた蟻は平和的蟻を自称するようになった。そして平和を唱えた一番目の蟻を顕彰し、その蟻の頭を保存した。ほかの一族の蟻がもっている頭は偽ものであり、我々はそのため12の部族の蟻を殲滅した。今、13番目の部族を殲滅しようとしていると言う。ヨハネスはそこを離れたあと、「あれは血に飢えたでたらめな社会だ」（38頁）と言う。二人がスイカズラの茂ったところで休んでいると、突然大きな影が差し、巨大なハンカチがスズランの上に敷かれた。かごと傘を持った人類の女性たちと、高くて黒い帽子をかぶった人類の男性たちが、黒い服装をした人類が、現れた。灌木や花が踏みしだかれた。煙草の煙が立って、鳥は逃げ、男女は歌いはじめた。長い金髪の青白い顔をした男が話した。人々は兄弟姉妹であり、美しい自然、造化の奇跡、神の日の光、花と鳥を論じた。彼らが食事に取りかかると、旋児たちは攻撃を始めた。蛙、青虫、蜘蛛、蟻、スズメバチがよりつき、咬み、刺しているうちに、強い雨が降りはじめ、人間たちは森から退散した。旋児は人類について言う、「彼らは木を切り倒し、彼らの場所にばかでかい四角い家を造る。彼らは気ままに花を踏みつけ、自分の楽しみのために、彼らの手のとどくところにいるあらゆる動物たちも殺す。彼らが一緒に巣くっている町は、すべて汚れて真っ黒だし、空気は濁り、またほこりや煙で毒されている。彼らは自然界と彼らの同類とあまりにも懸けへだたってしまっている」。（41頁）「なぜ泣くのかね、ヨハネス。君が人類の中

に生まれたからといって、泣く必要はないよ。」（41頁）ヨハネスは言う、「僕はやはり泣くだろう、すべての人類のために。」（41頁）旋児はヨハネスが人類の生活の中で受けるつきない悲哀、苦痛を言い、妖精の世界に留まることを勧めた。ヨハネスはすべてを捨てさることを願う。旋児は、コガネムシがその後、光にひかれて人間に捕らわれ、逃げだそうとするができず、最後に踏みつぶされたと言う。夜にさまよう虫たちは輝く父、太陽を見たことがないけれども、その記憶によって、光を放つものに憧れる。「不思議な、不可抗力の衝動が、人類を破滅させる方へ、彼らを用心させつつ知らない大きな光の幻像の方へと、彼らを引きいれていく。」（43頁）旋児は、ヨハネスが毎晩祈る上帝とは、笑うべき幻像だ、それは太陽ではなく、大きな石油ランプなのだ、何千という虫がそこに救われようもなくはりついている、と言う。旋児はヨハネスに祈りを教えると言い、地平線の見える落日の海辺に飛ぶ。「青いのは広大な水面である。ずっと遠くの地平線まで、太陽のもとに、一本の狭い線が光を放ちつつ、真っ赤な輝きをきらめかせていた。」（43頁）「小さなヨハネスは砂の丘に坐ってながめた――長い間じっとして黙ったままながめた――あたかも彼は死ななければならないかのように、あたかもこの宇宙の大きな黄金の門が荘厳に開いたかのように、しかもあたかも彼の小さな魂が無窮の最初の光の方に真っ直ぐに漂っていくかのように、なるまで。」（44頁）「彼の見ひらかれた目からあふれる人間の世の涙で、美しい太陽に幕がかかった。そして天と地の豪華さを、あの暗い、ふるえる黄昏の中へともどすようになるまで……そのとき旋児は言った、『このようにお祈りしなければいけない。』と。」（44頁）

（第5章）（約5頁）

秋の森の中で、ヨハネスは柏の木の葉に黒い斑点があるのを、旋児に尋ねる。旋児は小精霊が字を書いて余ったインクをかけたのだと言う。ヨハネスは小精霊に会わせてくれるようにたのんだ。ヨハネスは旋児とともに新しい生活を過ごし、大変幸福だった。森のキノコたちは自分たちの幸福を言いあっていた。彼らには今以上の幸福はありえなかったから。夜になり、朽ち

た木から小さな青い光が漂っていた。旋児は、小精霊の中で最も年をとり、最も利口な将知[14]〔私は知るだろうの意〕をヨハネスに紹介する。将知は十字蜘蛛のために蜘蛛の聖書を読んで聴かせていた。十字蜘蛛の英雄トヤポラは、三本の大木に網をかけ、一日1,200匹の蠅を捕った。トヤポラは数学者で、計算に基づき美しい網を導きだして、蜘蛛に網を張ることを教えた。トヤポラは網に鳥を捕らえ、何千という自分の子供を殺した。最後に、大風が三本の木もろともトヤポラを、遠くの森に運んでしまったと言う。ヨハネスは将知に、正しいことが書いてある本があるのだろうか、と尋ねる。将知は言う、真の本は存在するはずだ、それは幸福と太平をもたらすことができるものだ。それがどこにあり、誰が見つけることができるかを、将知は知っている。ただいくつかの条件が分からないのだ、と。ふくろうが突然前をかすめ飛び、将知は自分の木の洞に消える。旋児はヨハネスに言う、「そのような本は、将知が永遠に探しだせないし、君も探しだせないものだ。」（48頁）「その本の存在は、ちょうど君の影の存在のようなものだ、ヨハネス。どのように飛び走って、どのように周りを見て捕らえようとしても、捕まえたり取りもどしたりできない。しかも結局、君は自分自身を探しているのだと思うのだよ。馬鹿になってはいけない、そしてあの山の精霊のでたらめを忘れてしまいな。」（49頁）ヨハネスには旋児の話が分からなかった。ヨハネスはその本に、なぜすべてがこのようであるのか、現状のようであるのかが書いてあることを考え、低い声で、「将知、将知」と言った。

（第6章）（約3頁）

ヨハネスはそれ以後、旋児のそばにいても、ふたたびは楽しくなくなった。旋児の言うことは、彼には不満だった。多くのことはヨハネスには分からず、日夜心を煩わす疑問を尋ねても、はっきりした満足な答えを得ることができなかった。旋児は、「ヨハネス、結局君は人なのだろう、君の友情もほんとうに人類と同じようだ」（49頁）と言う。「いや、旋児。君のほうが将知よりも聡明だし、小さな本と同じくらい聡明だ。君はなぜすべてのことを教えてくれないの。」（49頁）とヨハネスは言う。旋児はヨハネスを説得する。多くの

人は将知を信じ、その本を自分で探したいと思う。彼らは不眠不休で暗黒の中でさらに遠くの方に掘り進む。彼らが探すのは金ではなく、小さな本を探すのだ。彼らが深くはまり込めば込むほど、花や光からますます遠くなり、彼らの期待も膨らんでいく。ある者たちはこの仕事のために愚昧となり、その理由さえ忘れる。すべては憎むべき将知の罪なのだ。前を凝視するヨハネスの目の上に、皺がよった。ヨハネスは言う、「やはり――君自身が言った――その本は存在している。ああ、それには君がその名前を言いたがらない大いなる光が載っていることを、僕には確かに分かる。」（50頁）旋児は忠告する、「僕を愛するのだよ、君の全存在で僕を愛するのだよ。僕のところで、君が探しだすものは君が望んでいるものより多いだろう。およそ君の想像できないことを、君は理解するだろうし、およそ君が知りたいと望むことは、君が自分自身であることなのだよ。」（50頁）ヨハネスはそれを信じ、旋児の胸の中で眠る。ヨハネスは、夜中に目覚め、なぜという疑問がわきでてくる。旋児は熟睡していた。そこに将知が現れる。将知はヨハネスの質問に答えて言う、「人類は金の箱をもっている、妖精は金の鍵をもっている、妖精の敵は探しだすことができない、妖精の友だけが開けるのだ。春の夜がまさにそのときで、赤い胸のコマドリがよく知っている。」（51頁）ヨハネスはそれを聞き喜んで、鍵をもっていることを告げ、旋児に尋ねようとしてもとの場所に戻ろうとする。ヨハネスの身体は大きく重くなり、旋児を呼ぶ声は人類の声のように響いた。青い小さな光、旋児は消えさった。憐れなヨハネスは地面に倒れ、絶望の後悔のなかで嗚咽する。

（第7章）（約3頁）

ヨハネスは、泣きはらした目で一晩中走った。森の境まで来て、雨の牧場を見た。ヨハネスは人類の中にいることを知る。ヨハネスはそこの庭師の家で世話になり、助けられた。父やプリストーを思ったけれども、ここで静かな渇望に耐えようとした。旋児は遠くに去った。彼を待とうと思った。ヨハネスはここに留まることを望み、庭や花の世話の手伝いをすることを庭師の老夫婦に願った。庭師夫婦はヨハネスが家でひどい目に遭い、逃げだしてき

たのだろうと考えて、彼が留まることを承知した。菊の花が咲き、雪がふった早朝、他の花はすべて死んだが、菊の花々は愉快げな顔をして、「僕たちはまだここにいるよ。」（54頁）と言った。しかし三日後にすべてが死んだ。ヨハネスは雪の野原、林の中を歩くこともあった。夜には、毎晩必ず大きくて黒い本を少し読んだ。その中の多くは「上帝」（55頁）についての議論だった。ある夜に、将知が現れる。「君があの本を探しだせないのは、まだ春ではないからだ。」と将知は言い、黒い本を信じるな、と言う。そのことから黒い本を読むたびに、ヨハネスはあの鍵のことを思い、黒い本が正当なものではないと思った。

（第8章）（約7頁）

春が訪れた。しかし旋児はまだ来なかった。ヨハネスは、「僕の罰はまだ終わっていないのだろう。」（56頁）と思った。池のそばの家に人が引っ越してきた。淡い青の服を着た金髪の少女と出会う。その肩には、赤い胸のコマドリがとまっていた。少女は、「良い日ね」と言い、親しげにうなづいた。それは旋児の目であり、旋児の声だった。彼女は栄児[15]と言い、遠くの大都市で生まれたと言う。「人類の中で？」（56頁）とヨハネスが尋ねると、栄児は笑った。それは旋児の笑いだった。栄児は、「人が好きではないのか。」（57頁）、「両親を愛していないのか。」（57頁）と問い、そして「誰を一番愛しているのか。」（57頁）と尋ねる。ヨハネスは、旋児の名前を出すことを躊躇する。ヨハネスは青い服を着た金髪のものこそ、その名前だと思う。誰か、その人以外に安らかでこの幸福感をあたえるものはいないと思い、「君だ」と突然に言う。栄児は笑い、ヨハネスの肩に手を回した。彼女はヨハネスより年上だった。彼らは林の中を歩き、花咲く山の麓に出る。胸の赤いコマドリは彼らについて飛び、黒い目で窺っていた。彼女が帰ったとき、ヨハネスは彼女が誰であるか二度と疑わなかった。彼女は旋児と一つだった。旋児の名前は彼の中で栄児と混ざりあっていった。ヨハネスは大変幸福だった。その日から、毎朝、ヨハネスは池のそばに行き、栄児の明るい姿が近づくのを待った。ヨハネスは、旋児から聞いた花や動物たちの物語を話した。また以前、

水底に下りて、サンショウウオがヨハネスの周りを泳いだり、海への長旅をしたウナギの話を聴いたことを、栄児に話す。なぜ今は二度と水底に行けなくなったのか、なぜすべてが終わったのか、と栄児は尋ねる。ヨハネスは、今は水底へ行くことができないし、ここにいたい、ライラックと栄児のそばにいたい、と答える。ヨハネスは記憶をたどろうとするが、以前の幸福をどのように失ったのか、すでに分からなくなっていた。将知がすべてを壊してしまったこと、しかし今すべてが戻ってきて、以前よりも良い、と言う。その晩、将知がヨハネスのところに来る。将知は言う、「今がちょうどその正しいときになった。胸の赤いコマドリに道を尋ねたのか。」（60頁）ヨハネスは答えた、「およそ望むことができるものは、僕はみんなもっている。僕には栄児がいる。」（60頁）将知は言う、「おまえはもっと幸福になれる――栄児もきっとそのようになる。」（60頁）翌日、ヨハネスはその小箱への道を知っているかどうか、胸の赤いコマドリに尋ねた。栄児は驚き、ヨハネスに事情を尋ねる。ヨハネスは栄児に小さな本のことを話した。ヨハネスが追憶の中で、「旋児、旋児」とつぶやくのを聞き、栄児は、旋児とは誰なのか、旋児が鍵をあたえたのか、とヨハネスに尋ねる。栄児は、その本がどこにあるのかを知っていると言い、明日の朝に、と約束する。

（第9章）（約9頁）

ヨハネスは長い間待った。栄児がやってきたが、赤い胸のコマドリは来なかった。栄児は、「来なさい、そしてあの本を見ることができる。」（62頁）と言う。ヨハネスはひそかに、それはこんなふうではありえないと思いつつ、栄児についていき、ある家に入る。そこには、たくさんの人と黒い服を着た男がいた。その男は、「いつもこの本を読んでいれば、そうすれば君の生活の道へと行くことになるだろう……」（63頁）と言う。ヨハネスは、「これは僕が思っているあの本ではありません。」と言う。求めているあの本には、「そこには書いてあります、なぜすべてがこのようであるのか、現状のようであるのか、はっきりと、分かりやすく。」（63頁）周りの人の上帝という言葉を聞いて、ヨハネスは旋児の言ったことを思った。「僕は上帝に対して畏敬を

もっていません。上帝は大きな石油ランプで、これによってたくさんの人が迷い誤り、破滅しました。」（64頁）黒衣の男は立ち上がるとヨハネスの腕をつかみ、まわりから冷たさと敵視を受ける彼を追いだした。ヨハネスは栄児を呼ぶが、しかし栄児は恐怖で部屋のすみに坐って、目を上げなかった。追いだされたヨハネスはそのあと泣かなかった。目の上の陰うつな皺がいっそう深くなり、それはもう消えなかった。ヨハネスは思う、鍵を取ってきて、彼らに示してやろう、と。将知が現れ、二人は一日中駆けて、以前バラの茂みに隠した鍵を捜しにいく。ヨハネスは見知っている砂の丘に着いた。バラは咲き終わり、黄色い月下香が咲く野原となっていた。ヨハネスは花々にバラのことを尋ねるが、知っているものがいなかった。将知は、ヨハネスに騙されたと言って、立ち去った。やがて花は、「人類とは話さない。」（66頁）と言うと、すべての生き物が静かになった。ヨハネスは考える、「僕は人なのだろうか。」（66頁）「僕は人でありたくない。僕は人類を憎んでいる。」（66頁）「僕は生活していかなければならないのか、しかもひとりの人間として。」（66頁）突然、大きな頭と大きな耳をした、痩せて細い足の、黒い小さな男が彼の前に立っていた。「穿鑿（せんさく）」[16]だった。穿鑿はヨハネスの事情を知っていた。そして将知の友人だと言い、将知の欠点は不存在だとする。穿鑿は逆立ちをし、怪しげな笑い顔をし、長い舌を出した。海の上には、雲の洞窟の高い門がきらめき輝いていた。「人はそこへ行って、そして入ることができるのか。」とヨハネスは尋ねた。そこはここと同じだ、美しい雲の中は茫漠とし、灰色で寒いのだ、と穿鑿は言う。ヨハネスは、誰を一番慕っているのかと問われ、栄児と答える、なぜなら彼女は旋児だから。穿鑿は旋児の名を聞くと、彼は実際には存在していない、ヨハネスは夢を見ていたのだと言う。穿鑿は言う、栄児はあの本のことは知らない、しかし穿鑿はあの本がどこにあるのか知っている、ヨハネスを連れて捜しに行こう、と。そして明日会うこととなり、今、ヨハネスは疲れはてて眠る。

（第10章）（約6頁）

翌朝、ヨハネスは穿鑿に起こされる。ヨハネスは、狭くてほの明るい小部屋

にいた。そこから見ると、暗くぼんやりと、見渡すかぎり家並みの列があった。茶色い煙がいたるところから立ち上り、通りへと沈んでいった。雑踏する通りには人々が蟻のように往来している。穿鑿は言う、「人はしばらく捜し求めると、或るものに出会う、その名は『永終』だ……」（71頁）それは「死」のことだった。部屋に背の高い、痩せた、目の落ちくぼみ、手の長い男が訪れてくる。その目は厳しく暗かったが、残忍ではなく、敵意もなかった。それが「死」だった。穿鑿は「死」に言う、「これがヨハネスだ」（72頁）、穿鑿とヨハネスは一緒にある本を捜し求めにいかなければならない、と。「死」は、それは正当なことだ、ヨハネスが「大きくなり、そして良い人間にならなければならない。」（73頁）と言う。「僕は人でありたくない、その他のと同じような。」（73頁）と言うヨハネスに、「死」は、人がどのように良い人になることができるのか、を穿鑿が教えることができると言う。栄児に会えるだろうかと尋ねるヨハネスのことを、穿鑿は、彼が今でも妖精になることを幻想しているのだ、と言う。「死」は、連れて行って欲しいと願うヨハネスを拒絶し、今は、ヨハネスが仕事をし、捜し求め、観察するべきときなのだと言う。「死」は立ち去る。穿鑿は、昔からの穿鑿の学生、数字博士のところにヨハネスを連れていく。二人は「死」が静かに歩く都会の雑踏を通り、博士の実験室に着く。そこには白い実験動物が緊縛され、首から血を流していた。それはまだふるえて、生きていた。その動物は、ヨハネスが妖精と過ごした夜に、身と頭をよせて寝た野ウサギだった。ウサギの紐をとくヨハネスを、穿鑿は止め、博士はヨハネスをいぶかる。穿鑿は言う、「我々は探し求めなければならない、そうだろ。我々はここにいて、決して砂の丘の旋児のもとや理性のない畜類の中にいるのではない。我々は人類でなければならない——人類だ。もし君が子供に留まりたいのなら、（中略）一人で捜し求めに行けばよい。」（76頁）ヨハネスは黙り、そして穿鑿を信じて、強くなることを望み、目を閉じた。博士は言う、「私たちはまさしく人類であって動物ではない。しかも人類の尊厳そして科学の尊厳は、数匹の子ウサギの尊厳よりはるかにすぐれたものなだ。（中略）科学の人は、すべての他の人よりすぐれている。しかし彼はまた普通の人の小さな感慨を、大事業、科学のために、犠牲

としなければならない。君はこのような人になることを願うのか。」（76頁）穿鑿は言う、「ヨハネスは最高の知恵を捜し求めようとし、万有に根本的基礎をたてたいと思っています。」（76頁）ヨハネスは頷き、震える手で、そのとかれた縄で子ウサギを再び縛る手伝をした。

（第11章）（約9頁）

穿鑿はヨハネスを都市の隅々まで連れていこうとする。穿鑿は、人々がひしめき合い、すべてが灰色で陰うつな困窮した区域を偏愛した。穿鑿は、煙が立ちのぼる大きな建物の中に入り、ヨハネスははじめてその中を見た。そこには耳を揺るがす喧噪と大きな車輪のうなる音があり、長いベルトがうねうねと延びていた。無数の人々が青白い顔と黒い手をし、黒い服を着て、黙々と休まずに働いていた。年中、彼らはこのようであってこそ、一人の人間としてあり得るのだと言う。二人が薄汚い巷に入っていくと、人々はうごめき、ひしめきあい、叫び笑い、時には歌を唱っていた。部屋は狭く暗く、髪の毛のぼさぼさの若い女性が痩せた赤ちゃんに歌を唱っていた。ヨハネスは問う、「ここで生きている人たちは、いつもでもこのように苦悩して、生活が困難なのだろうか。」（77頁）穿鑿は言う、彼らはこれを幸福と称している。彼らはもう慣れて、ほかの事を知らなくなっている。あれはいいかげんな、善し悪しを知らない畜生だ、と。ヨハネスは泣いた。穿鑿はこうした現実の人々の生活における苦しみ、争いの存在を、ヨハネスの気持ちを逆なでして楽しむように教えた。ヨハネスは苦悩から解放してくれることを思い、「大きな光」（78頁）を知っているのか、と穿鑿に尋ねる。穿鑿は、それは旋児の空談だ、「人々と自分自身以外に、ほかのものはない。」（78頁）と答える。穿鑿は、星々も小さな光にすぎず、星々の中のすべてがこの世界と同じだ、と言う。二人は、前面にたくさんの馬車が止まり、明るい光と音楽がもれ聞こえる大きな建物を見る。そこではきらびやかに盛装し、礼儀正しい人々が踊っていた。穿鑿は、この人々の虚偽と微笑の仮面を指摘する。二人の背後から「死」が現れ、「死」の指さす老婦人が突然目を閉じ、若い娘さんが身震いして立ち止まり、前方を凝視したままになる。さらにその夜、穿鑿はヨハ

ネスを墓園に連れて行き、二人は小さな姿となって、ハサミムシとミミズに案内され、虫の這う地下の細い道をたどり、棺桶とその中の遺骸を幾体もたどって見ることになる。穿鑿についてたどり着いた平地は、遺骸の額部分であり、明かりの下で見ると、舞踏会で最も美しかった若い女性の硬直した遺骸だった。落ちくぼんだ目、死者の笑う灰色の唇があった。穿鑿はこれが真のことだ、これは旋児が言えないことだと言う。次に見たものは白骨化した遺骸だった。次々と遺骸を見ていき、新しい棺桶にたどり着く。穿鑿が隙間をつくって入っていき、ヨハネスは手を組み合わせた遺骸の上にきた。ヨハネスがその遺骸の指を見ると、見覚えのある自分の手であった。ヨハネスは気を失い倒れた。

（第12章）（約5頁半）

朝、目覚めてから、ヨハネスは穿鑿に尋ねた。昨日、はっきりと目にしたすべてのことは、本当のことだったのだろうか、と。穿鑿は否定する。二人は数字博士のところに向かう。その途中の通りで、昨夜、墓場に横たわっていたその人が大声で笑っているのを見る。数字博士の下で、ヨハネスは勤勉に忍耐強く、何ヶ月にもわたって学んだ。ヨハネスは光明を捜し求めて、それが長くなればなるほど、彼の周囲はますます暗くなった。長く観察すると、すべては数字になった。数字博士は数字はすばらしい、数字は彼においては光明だと言う。しかしヨハネスにおいては暗いものだった。ヨハネスは自然界の設計師の巧妙さに感嘆する。しかし穿鑿は、愚かな人類はその設計図から外れて、自分の知恵で歩きはじめ、そして失敗して悪い事態を招くとする、しかしそれは愚かな人類の罪であるとのみ言えるのだろうか、と問う。こうした穿鑿の言葉は、ヨハネスの胸に悲痛を生じさせた。ヨハネスは学べば学ぶほど、旋児や栄児に対するあこがれが消えていった。そして彼の周囲は暗黒になって行った。勉強のないときには、穿鑿はヨハネスを世の中に連れて行った。たくさんの病人が広間に横たわる病院へ行き、また7年も横たわる元船員の病人を見た。ヨハネスはだんだんと旋児はいなかったのだと信じるようになった。穿鑿は言う、全然いなかった、「ただ人々と数字だけがある」

（90頁）、と。ヨハネスは言う、「自分は人になりたくない、それはあまりに恐ろしい。」穿鑿は言う、数字博士は傍観者の目で人類を見る、人類の苦難とは関わりがないかのようだ。「彼〔数字博士〕は疾病と困窮の間に飛びこんでいき、傷を受けないかのようだし、しかも彼は死と行き来して、死なない者のようだ。彼はただ見るところを理解することだけを望み、およそ彼にはっきりするところがあれば、彼においては同じく正当なのだ。ただ理解しさえすれば、彼はすぐに満足する。君もこのようでなければならない。」（90頁）ヨハネスは、「僕は永遠にできない。」（90頁）と言う。これがいつも彼らが話し合い、希望のない結末だった。ヨハネスは疲れ、気ままになり、旋児の言った多くの人々と同じになった。ある冬の雪の積もる朝、ヨハネスと穿鑿がいつもの道を歩いていくと、若い娘さんたちが教科書をもち、雪をぶつけ合って興じていた。その中の一人の娘さんがヨハネスを見つめ、二度頷いた。それは栄児だった。ヨハネスは言う、「これはありえないことだ。彼女は旋児に似ていない。彼女は普通の娘さんだ。」（91頁）ヨハネスは駆けだして去る。「これが結末だ。」（91頁）「すべてがなかった！」（91頁）

（第13章）（約9頁）

大都市に春がやってきた。ヨハネスは父のことを思い出し、穿鑿に故郷に帰してくれるように求める。父がどうなっているのか。自分がこれほど長く外へ出ていて、父はまだ怒っているのだろうか、と穿鑿に尋ねる。穿鑿は言う、たとえそれを知ったとして、なんの益があるのか、と。ヨハネスの帰郷の思いはつのるばかりだった。春が過ぎていこうとする。或る日の早朝、数字博士は或る病人を診にいかなければならないと言い、ヨハネスも同行する。穿鑿は異常に喜んだ。彼らは鉄道に乗り、歩いた。そこには砂の丘があり、思いがけないことに、そこはヨハネスの故郷だった。彼ら三人の後ろから黒い人影がついてくるようだった。ヨハネスは突然非常に驚いた、というのも彼は故郷の自分の家の前に立っていた。家の中は、子供時代の生活を思い起こさせる懐かしいものであったが、しかしヨハネスにはそこから切り離されたような、もの寂しい痛切な感じがあった。そして「死」が彼らのあと

からついてきた。階段を上ると、規則正しく喘ぐ、苦痛の声が聞こえてきた。それは父の寝室であった。父は変わりはてていた。青白く、灰色の陰影を帯び、目は半ば閉じられ、歯は半ば開いた口の中に見えた。頭は枕に沈み、呻吟するたびにもち上がり、また疲れてその傍らに落ちた。ヨハネスはベッドの傍らにじっと立ち、目を見開いて、よく知った父の顔を見つめた。ヨハネスは手で触れようとはせず、疲れはててシーツにおかれた、老い衰え枯れた父の手を握ろうとはしなかった。ヨハネスの周りのすべてが暗くなった。父に一瞬間変化があり、呻吟が止み、まぶたがゆっくり開かれ、目は探るようにあちらこちらを凝視し、唇は何かを言いたそうにした。「こんにちわ、お父さん」（96頁）とヨハネスは低い声で言った。その疲れたまなざしは一瞬ヨハネスを見たとき、疲れた微笑が、落ちくぼんだ頬に浮かんだ。細い痩せた皺のよる手がシーツからもちあがり、ヨハネスの方に意味の分からぬ動きをしたあと、力なく落ちた。数字博士が近より、検査をはじめた。ヨハネスは窓際にしりぞき、規則正しい父の呻吟が再びはじまった。それは死の近よる足音のようだった。枕元には、彼らについてきた黒い形象、「死」が坐っていた。穿鑿は言う、およそ穿鑿がヨハネスに言っていたことは本当だったのではないか。嘘を言っていたのは旋児なのか、それとも自分〔穿鑿〕なのか。穿鑿は言う、病人がヨハネスの父親であるかどうかは、なんの関係もない。彼は死のうとしている人であって、これは平常のことだ、と。父の呻吟が止まり、静寂が訪れた。数字博士は後を任せて去り、穿鑿が解剖刀をもってベッドに向かった。ヨハネスは困惑から脱して、穿鑿の前に立ちはだかった。穿鑿は言う、「これはどういうことであるのか、見てみなければならない。」（99頁）ヨハネスは、「その必要はない。」（99頁）と言い、その声は大人の男のように響いた。穿鑿は近づこうとし、格闘となった。ヨハネスはひるまなかった。ヨハネスは息が整わず、なにも見ることができなくなったが、しかしなお穿鑿と格闘し続けた。ヨハネスの握る両腕の抵抗力がなくなり、彼が目を上げると、穿鑿は消えていた。「死」は言う、これは君のほうが正当だ、穿鑿は二度と現れない、と。ヨハネスは言う、「旋児は？それなら旋児に会えるのだろうか？」（100頁）その幽暗の人は、長い間じっとヨハネスを見

ていた。「私だけが旋児のところへ連れて行くことができる。私だけがあの本を捜し出すことができる。」（100頁）自分も連れていって欲しいと言うヨハネスに、「死」は首を振る。「君は人類を愛する、ヨハネス。君自身は知らないが、しかし君は永遠に彼らを愛している。良い人間になること、それが比較的に良いことだ。」（100頁）「死」は霧のように消える。ヨハネスはベッドの縁に頭を伏せて、亡くなった人のために泣いた。

（第14章）（約4頁）

ずいぶんと時間がたったあと、ヨハネスが頭を上げると、日が斜めになっていた。外は太陽によって黄金の炎で満たされているかのようだった。「太陽の子！太陽の子！」と呼ぶ旋児の声が聞こえるようだった。ヨハネスはかつて旋児が教えてくれたお祈りの時であるかのように思った。彼の前方に旋児の光りの形象が現れ、右手で彼を差し招き、左手には物を持ちあげているかのようだった。旋児の形象は風で漂うように遠のき、ヨハネスは重い足で追いかける。丘の中腹まで来ると、そこにはバラが咲き、様々な花が咲いて芳香を放ち、虫たちが飛んでいた。「彼が旋児のところに行くことができさえすれば、それはどんなに美しく、どんなに幸福であることだろうか。」（102頁）しかし旋児は遠くに漂っていった。ますます遠ざかる旋児の形象を追いかけて、丘の尾根の端にたどりつき、旋児の形象を見た。その物は高く掲げられた手の中にあり、輝いて光っていた。前は海だった。ヨハネスは丘に跪き、海をじっとながめた。夕焼けの雲の峰は雄大な円をなして落日の周りにあった。海には一筋の紫の火の道があった。それは炎の光の道であり、遙かな天の門に向かっていた。その道のこちら側には、透きとおった水晶のような乗り物があって、火の道に浮かんでいた。船の片側には旋児のすらりとした姿が立っていた。ヨハネスは他方の片側に幽暗な「死」を見た。「旋児！旋児！」（103頁）とヨハネスは呼んだ。ヨハネスが乗り物に近づこうとしたとき、火の雲の取り囲む明るい空間に、小さな黒い形が現れ、だんだんと大きくなって、一人の人が、燃えさかる炎のような水の上を静かに歩いてきた。それは一人の人であり、彼の顔は青白く、彼の目は深くて暗かった。彼の目

の中には限りない暖かな悲痛があった。「あなたはイエスか、あなたは上帝か？」（103頁）とヨハネスは尋ねる。その人は言う、「それらの名前を口にしてはいけない、」（103頁）「以前、それらは純潔で神聖で宣教師の法衣のようであったし、貴くて人を養う穀物のようであった。しかしそれらは馬鹿のつまらぬ服飾となった。それらを口にしてはいけない、なぜならそれらの意味は惑いとなっており、その信奉は嘲笑となっているからだ。誰か私を知りたいのなら、彼は自己のところからその名前を捨て、そして自己に耳を傾けるのだ。」（103頁）ヨハネスは言う、「僕はあなたを知っている」（103頁）。その人は言う、「私はそれなのだ、それは人々のために君を泣かせる、君は君の涙を理解できないけれども。私はそれなのだ、それは愛を君の胸に注ぐ、君が君の愛を理解していないときに。私は君と同じところに存在する、しかし君は私を見ない。私は君の魂に触れる、しかし君は私を知らない。」（103頁）ヨハネスは尋ねる、「なぜ私は今やっとあなたを見たのですか」（103頁）。その人は答える、「たくさんの涙が私を見る目をはっきりさせなければならなかった。しかも君自身のためばかりでなく、私のために泣かなければならなかった。それで、私は君のところに現れた、君もまた旧友のように私を知ったのだ。」（103頁）その人は輝き揺れる乗り物を指した、それは火の道をゆっくりと遠くへと漂っていた。「これは君が憧れているすべてに行く道だ。」（103頁）「選びなさい。そちらは大きな光であり、そこではおよそ君の知ることを渇望するものが、君自身となるだろう。二つのもの〔旋児と〈死〉を指す〕がなければ、君は永遠にあれを捜しだすことができない。」（103頁）そしてその人は次に東方を指し、「あのところは人間性と彼らの悲痛であり、そのところが私の道だ。決して君の消した惑いの光ではなく、私は君と同伴するだろう。」（103頁）ヨハネスは、差し招く旋児の形象からゆっくりと目を移していった。そしてその厳正な人に向かって手をさしのべた。ヨハネスは彼の同伴者とともに、身を切るような夜風に逆らって、大きく暗い都市、すなわち人間性と彼らの悲痛のあるところに向かう艱難な道に進んだ。

2.2 『小約翰』の主題について

魯迅は「引言」（初出は、「『小約翰』序」（1927・5・30、週刊『語絲』第137期、1927・6・26）の中で次のように、物語を要約している。

「これもまことに人間性の矛盾であり、禍福のもつれあう悲歓である。人は幼時期においては、〈旋児〉につき従い、自然を友とする。幸か不幸か、やや長ずると、知を求める。どのようであるのか、何か、なぜか？そこで知識欲の具象化、小精霊〈将知〉を招来し、しだいになお科学研究の冷酷な精霊、〈穿鑿〉に出会う。児童時代の夢幻は粉々に砕かれた。科学研究とは、『学ぶすべての最初は大変良いものだ、――ただ研鑽することが深まれば深まるほど、そのすべてはまたますますもの寂しく、暗澹となる。』――ただ〈数字博士〉だけは幸福である、すべての結果が紙の上で数字に変わりさえすれば、彼は満足で、光明を見たことになった。誰かがさらに進もうとすれば、苦痛を味わうことになる。なぜなのか。原因は、彼が若干を知っても、すべてを知ることがなく、ついに結局〈人類〉の一人であって、自然と合体し、天地の心を心とすることができないことにある。ヨハネスはまさしくこのような読めばすべてを知る本を捜し求めていた、しかしこれがためにかえって〈将知〉を得、かえって〈穿鑿〉と遇い、ついには〈数字博士〉を師とするにすぎず、いっそう多くの苦痛を増した。彼が自身のなかに神を見て、『人間性と彼らの悲痛のある大都市』に真っ直ぐ向かおうとするときになって、はじめてこの本は人間の世界にはなく、ただ二カ所から探して得ることができることを理解する。一つは〈旋児〉であり、すでに失われた、もともと自然と合体する混沌であり、一つは〈永終〉――死であり、まだ行きついていない、また自然と合体する混沌である。しかも彼ら二人はもともと同舟であることを、はっきりと見る……」（6頁～7頁）

前節のあらすじと上の魯迅の要約を手引きとして、『小約翰』の主題を考える。

語り手は、小さなヨハネスが精神的に成熟していく過程をたどっている。そして最後の場面において、これからなおヨハネス自身が成熟していくであろう場所、大きく暗い都市、人間性と彼らの悲痛のあるところに向かう道を

選択するように導いていく。[17]物語の中で、小さなヨハネス自身が大きな困惑をともないつつ成熟していく過程は、彼自身にそれほど明確に自覚されていない。それゆえに語り手は、ヨハネスが最後の選択をする場面（第14章）において、ヨハネス自身の内面に存在する成熟した精神を、導き手として具象的に出現させたと思われる。言い換えれば、語り手は、ヨハネスがその地点で、ヨハネス自身によって人生の選択をすることができるまでに成熟する過程を、ヨハネスに歩ませてきたと言える。

語り手は、ヨハネスを妖精の世界に旋児とともに漫遊させた。そのとき、人類の姿は妖精の世界から見て、揶揄し批判すべき姿をとって現れた。（第2、3、4章）

しかしヨハネスは、将知（「知識欲の具象化、小精霊」）の言葉を信じ、なぜすべてがこのようであるのか、現状のようであるのかが書かれてある本、その知識を求めたため、妖精の世界を失ってしまう。（第6章）

ヨハネスは穿鑿（「科学研究の冷酷な精霊」）に連れられて、人類の現実の社会の様子、工場、貧民層の街、病院の患者、きらびやかな舞踏会等を見、また様々な人間の死に直面することになる。さらには穿鑿に連れられて、ヨハネスは埋葬された人々の遺骸と自分自身の遺骸にも墓場の中で対面した。（第11章）

免れない将来の死と直面して、ヨハネスは自分の生をいかに生きるかを考えていく。ヨハネスは数字博士の下で、科学的認識を深めていこうとする。しかしヨハネスは、数字博士のように、世界に対する冷徹な科学的認識と解釈に満足することはできないと感じている。（第12章）

父の死を看とった後に、ヨハネスは、自分が数字博士のように冷徹な科学的認識に徹して生きることができないことを知る。穿鑿はヨハネスの父の遺骸に解剖刀をもって近づこうとし、ヨハネスはそれを阻止しようとする。ヨハネスは穿鑿と格闘して、その解剖を阻止した。その後、穿鑿は消えた。（第13章）

ヨハネスは、人類の現実の社会的生活、人類の免れがたい死と直面することにより、人間性と彼らの悲痛にみちた社会と生活、人類の生と死を知るこ

とになった。また父の死に際して、ヨハネスは冷徹な科学的認識に徹して自分の生を生きることができないことも認識した。ヨハネスは将来の免れがたい人間の死と直面して、自分の生をどのように生きるかを考えざるを得ず、最後の選択をする。数字博士のように、世界に対する冷徹な科学的認識と解釈の追求に止まるのではなく、また世界に対する疑問を解く書を旋児と「死」に導かれて求めるのでもなく、ヨハネスは、人間性と彼らの悲痛のあるところに参与しようとする。すなわち、成長しつつある、精神的に成熟しつつあるヨハネスが、人類の現実の世界、人類の人間性と彼らの悲痛のある社会と生活のあるところに向かうことが描かれた。（第14章）

語り手は、この物語の最初から最後まで死と生の問題（それは妖精の世界にも現れ、最終章の父の死、旋児と「死」の同乗する舟まで）を、すなわち人の免れがたい死と、それゆえに現実の社会と生活において人がいかに生きるかの課題を、基調低音として持続させていると思われる。[18]

この物語は童話風に、人生と世界に対する児童･少年の認識、現実の社会に対する児童・少年の認識が、成長・深化する過程をたどって語られる。物語全体をとおして、自然と社会、死と生の課題が貫いている。内容は、残酷な場面（墓場での遺骸との対面）も含みつつ、成人へと成熟しつつある児童・少年が、自然と融合する幻想から人生と現実社会に対する冷徹な認識へ、さらには人類に対する愛と関与へと成熟を深めていく。しかし物語の内容は、自然に対する児童・少年の幻想を全否定するものではない。最後までヨハネスは、妖精の世界に対する憧れと理解を留めている、すなわち「赤子（せきし）の心を失っていず」（「引言」）[19]という状態を留めている。しかし同時に、ヨハネスの認識は、妖精の世界の視点からの人類批判に止まることなく、また数字博士の冷徹な科学的認識と解釈に止まっていない。ヨハネスは人類自身が生みだす人類の人生と社会の悲痛に対する認識を深めながら、人間性と彼らの悲痛のある暗い大都市に向かい参与することを選択したと思われる。すなわちヨハネスは「赤子の心を失っていず」という心情を留めながらも、しかし旋児と「死」の同舟する道を選択せずに、現実世界における人類自身が生みだした人生と社会の悲痛に対する認識に基づき、現実社会に向かって参与し奮

闘することを選択する。[20]この物語は、こうした一人の人間として成熟していきつつある、そしてこののち人間性と彼らの悲痛のある暗い大都市の中で奮闘し、なお人類に対する愛に基づき成熟していくであろうヨハネスの選択と生き方を示唆していると思われる。

注

1 〔　〕内はすべて中井の注記、以下同じ。

2 上海図書館所蔵本『小約翰』（デジタル版による）の表紙図（7）と中扉図（8）は次の図のようである。中扉の次ページに「1928年1月印行:1至1千冊。」（図〈9〉）とある。「引言」（1頁から12頁）、「原序」（13頁～22頁）、次の3頁分が欠落し、27頁から本文の第1章がはじまる。236頁まで本文で、237頁から「附録」（237頁）であり、「拂来特力克・望・藹覃　荷蘭　波勒・兌・蒙徳　著」（239頁～249頁）、「動植物訳名小記」（251頁～260頁）という構成である。『魯迅訳文全集』第3巻の構成は同じである。

　表紙について当初、初版本は図（10）（『魯迅訳文全集』第3巻）のようであった。初版の途中から、表紙のみが変わった可能性がある。

図（7）

図（8）

図（9）

図（10）

3 初出は、「『小約翰』序」（1927・5・30、週刊『語絲』第137期、1927・6・26）である。

4 波勒・兌・蒙徳（ポル・デ・モント）の「拂来特力克・望・藹覃」（魯迅訳）では、《De Kleine Johannes》と表記している。また、後述のドイツ語の原文、「Frederik van Eeden」（Pol de Mont）も同じ。これは、『オランダ文学名作抄』（朝倉純孝、大学書林、1977・11・30）によれば、オランダ語の原題と思われる。

5 『Das litterarische Echo』（『文学の反響』）第1巻第21期（1899・8・1、掲載図は東京大学大学院人文社会系研究科文学部図書室所蔵本の複印）には、図（4）のように、「Aus dem “Kleinen Johannes”. von Frederik van Eeden」（1332段、『小約翰』第5章）のほか、図（2）（3）の「Frederik van Eeden. von Pol de Mont」）も掲載されている。魯迅の翻訳した「拂来特力克・望・藹覃」（荷蘭　波勒・兌・蒙徳　著）の底本は、『Das litterarische Echo』（『文学の反響』）第1巻第21期（1899・8・1）掲載のものである可能性が高い。なお、この論

文「Frederik van Eeden. von Pol de Mont」が『文学の反響』）第1巻第21期に掲載されていることついて、「第13章　童話翻訳（二）：望・藹覃的『小約翰』詮釈」（王家平、『《魯迅訳文全集》翻訳状況与文本研究』、社会科学文献出版社、2018・5）がすでに指摘している。

周作人は「関于魯迅　二」（『魯迅研究学術論著資料滙編』第2巻、中国文聯出版公司、1986・8、原載半月刊『宇宙風』第30期、1936・12・1）で次のように言う。

「その中に『Aus Fremden Zungen』という名（このようであったかどうかはっきりと覚えていない）の雑誌があって、内容が最もよく、かつてオランダの作家エーデンを評論した文章があり、『小約翰』を翻訳する豫才〔魯迅の字〕の意思は実際ここに起因している。」（92頁）

ここで周作人が言及するエーデンを評論した文章は、未詳である。

6 Paul Raché博士（パウル・ラシェ博士）の読み方について、山口庸子先生（名古屋大学大学院人文科学研究科、准教授、ドイツ文学）にご教示をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。魯迅は、「保羅・賚赫」（「原序」）と表記しており、それは「ラッヘ」に近い音であろうと思われる。「象徴主義と魯迅訳『小さなヨハネス』」（工藤貴正、『魯迅と西洋近代文芸思潮論』〈汲古書院、2008・9・25〉）は、「パウル・ラッシェ」と表記する。

7 図（5）（6）は、http://e-learning.germanistik.fu-berlin.de/deutsch/erster_teil_eden_fles.pdfのサイトからダウンロードした、1892年版の「Der kleine Johannes」の表紙と中表紙のPDF版である。このサイトには、第4章まで（表紙、中表紙、序と本文第1頁から第43頁まで、計53枚）、掲載されている。

8 魯迅の「日記十五（1926）」（『魯迅全集』第15巻、人民文学出版社、2005・11）の7月6日の項に、「下午往中央公園，与斉寿山開始訳書。」とあり、また、8月13日の項に、「往公園訳『小約翰』畢，寿山約往来今雨軒晩餐，」とある。

9 魯迅の「日記十六（1927）」（『魯迅全集』第16巻、2005年版）の5月2日の項に、「開始整理《小約翰》訳稿。」とあり、また、5月26日の項に、「下午整理《小約翰》本文訖。」とある。

10 魯迅の「日記十六（1927）」（『魯迅全集』第16巻、2005年版）の6月14日の項に、「上午得三弟信，6日発、于是《小約翰》全書具成。」とある。

11 私が目をとおした小論の主題に関する論文等、参考とした文献等は次のものにとどまる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

〔中国語参考文献〕

①「女師大風潮和三・一八惨案」、許羨蘇、「回憶魯迅先生」、1961・6・30、『魯迅研究資料』第3輯、文物出版社、1979・2、内部発行

②「未名社出版的書籍和期刊」、李霽野、『魯迅先生与未名社』（湖南人民出版社、1980・7）所収

③『魯迅伝略』、朱正、人民文学出版社、1982・9

④『《両地書》研究』、王得后、天津人民出版社、1982・9

⑤「智慧的痛苦――試析魯迅訳介『小約翰』的思想動因」、袁荻涌、『昭通師専学報（社会科学）』第19巻第3期、1997年第3期

⑥『魯迅年譜（増訂本）』全4巻、李何林主編、人民文学出版社、2000・9

⑦「一個童話」、孫郁、『小約翰』（胡剣虹訳、華夏出版社、2004･5）所収、原載は『書摘』
⑧「在自身中看見神――読魯迅訳作『小約翰』」、牛布衣、『小約翰』（胡剣虹訳、華夏出版社、2004・5）所収、原載は、“新浪論壇”、2003・8・29
⑨「過屠門而大嚼：訳童話詩『小約翰』（1928）」、王友貴、『翻訳家魯迅』、南開大学出版社、2005・7
⑩「魯迅中期翻訳文本比較分析――荷蘭作家望･藹覃的成人童話『小約翰』」、呉鈞、『魯迅翻訳研究』（斉魯書社、2009・1）所収
⑪「第5章　児童文学翻訳」、『二十世紀中国翻訳文学史　五四時期巻』、秦弓、百科文芸出版社、2009・1
⑫「〈新童話観〉背後的啓蒙――重読魯迅訳本『小約翰』」、陳芸、『山西師大学報（社会科学版）』第40巻第3期、2013・5
⑬「魯迅児童文学翻訳的叙事解読――以『小約翰』為例」、馬麗青、『牡丹江大学学報』第22巻第12期、2013・12
⑭「関于『小約翰』的新訳本」、李新宇、『小約翰』（景文訳、長江文芸出版社、2017･9）所収
⑮「第13章　童話翻訳（二）：望・藹覃的『小約翰』詮釈」、王家平、『《魯迅訳文全集》翻訳状況与文本研究』、社会科学文献出版社、2018・5
〔日本語参考文献〕
①「ヨハネス少年」、朝倉純孝、『世界名著大事典』第6巻、平凡社、1961・3・18
②『オランダ文学名作抄』、朝倉純孝、大学書林、1977・11・30
③「魯迅における『白心』の思想――エーデンの童話と蕗谷虹児の抒情画」、藤井省三、『GS・たのしい知識』第3巻、1985・10・15
④「魯迅とアンデルセン――児童の発見とその思想史的意義――」、藤井省三、『伊藤漱平教授退官記念　中国学論集』、汲古書院、1986・3・31
⑤「魯迅，ファン・エーデンへの共鳴――魯迅訳，パウル・ラッヘ〈《小さなヨハネス》序文〉とポル・デ・モント〈フレデリック・ファン・エーデン〉の記述を中心に――」、工藤貴正、『大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門　人文科学』第44巻第1号、1995・9
⑥『ある中国特派員』、丸山昇、田畑書店、1997・6・15
⑦『中国国民革命――戦間期東アジアの地殻変動』、栃木利夫･坂野良吉、法政大学出版局、1997・12・18
⑧『中国国民革命政治過程の研究』、坂野良吉、校倉書房、2004・3・15
⑨『魯迅と西洋近代文芸思潮論』、工藤貴正、汲古書院、2008・9・25

[12]「オランダの海辺における砂の丘の風景は、本書の描写についてだけでも、憧れさせるのに十分である。」（「引言」、1927･5･30）と言うように、魯迅は『小約翰』の風景描写に当初、そしてその後も魅了された可能性がある（第五章には、海辺の風景はなく、森の描写である）。

「第13章　童話翻訳（二）：望･藹覃的『小約翰』詮釈」（王家平、『《魯迅訳文全集》翻訳状況与文本研究』、社会科学文献出版社、2018･5）は、魯迅が当初『小さなヨハネス』に魅了された理由を、風景の描写に求める以外に、次のように指摘する。

「この第五章は小さなヨハネスの人生の転折点と言うこともできる。彼は将知に会い、将

知は言う、彼はいま『真の本』を探しているところで、その本は『大きな幸福と大いなる太平』をもたらすことができる、と。

小さなヨハネスはのちにこの『真の本』を捜しだすことができるのかどうか。作者〔ファン・エーデン〕はここに幾重もの緊張感を留めておいた。（中略）魯迅は日本留学時期において、まさしく自分の人生の『真の本』を捜していた時代だということができる。（中略）

孜孜としてたゆまず問題の答えを捜していた青年魯迅は、小さなヨハネスが将知の言う『真の本』を捜そうとすることを読んだとき、その内心に心を動かされないはずがなかった。まして『小さなヨハネス』の作者は『詩医』であり、これも彼に『非常に心を引かれる』思いをさせた。」（234頁）

この点について、「象徴主義と魯迅訳『小さなヨハネス』」（工藤貴正、『魯迅と西洋近代文芸思潮論』〈汲古書院、2008・9・25〉所収）は次のように指摘する。

「はじめて『小さなヨハネス』に出会った1906年時点での作品と作者エーデンに対する魯迅の共感の度合いと、翻訳を開始した1926年の時点での魯迅の共感の度合いとでは、後者の方が当然深まっていると考えられる。」（190頁）

小論は、魯迅の共感の度合いがどの点において深まったのかについて、当時の状況の中での共感の度合いと内容を推測する。

[13]「魯迅における『白心』の思想――エーデンの童話と蕗谷虹児の抒情画」（藤井省三、『GS・たのしい知識』第3巻、1985・10・15）は、1927年四・一二反共クーデターと『小さなヨハネス』を関連づけて、概ね次のように指摘する。魯迅を支え、「人類とその苦悩が存在する」状況を直視させ続けた思想は、「人の愛、赤子の心」であり、こうした純真無垢の精神こそが不条理な現実を最もよく認識でき、人を改革者にさせる精神である、と「引言」で魯迅は語るとする。

また、「象徴主義と魯迅訳『小さなヨハネス』」（工藤貴正、『魯迅と西洋近代文芸思潮論』〈汲古書院、2008・9・25〉）は次のように指摘する。

「『小さなヨハネス』の翻訳を完全に決意させたエネルギーの源は26年3月18日のいわゆる〈三・一八事件〉から来るものであり、かつ〈三・一八事件〉は『鋳剣』の創作動機と関係を密にする。そしてまた、『小さなヨハネス』翻訳を早め貫徹させるエネルギーの源は27年4月12日の〈四・一二クーデター〉発生から来るものであろう。」（184頁）

小論では、上記の指摘を参照しつつ、『小さなヨハネス』の主題と翻訳の動因を関連させて、自分なりの推測を出すことにする。

[14]「引言」（前掲）で、「将知」について魯迅は次のように言う。

「文章を必ず直訳に近くしようとしたのと逆に、人物名はむしろ意訳した、というのもそれは象徴であるから。小精霊Wistikは去年相談して決めたのは『蓋然』である。今、『蓋』は疑問詞であり、やや不適切なところがあることから、いっそ勝手に『将知』と改めた。」（「引言」、8頁）

私が目をとおした、その後の『小約翰』の中国語訳本には、『小約翰』（胡剣虹訳、華夏出版社、2004・5）と『小約翰』（景文訳、長江文芸出版社、2017・9）があり、ともに1895年初版の英文訳本（中国国家図書館所蔵、周作人寄贈本）を底本として翻訳するとしている。後者の人名訳は、魯迅を踏襲している。前者は、「旋児」を「牽牛小子」、「将

知」を「万事通」、「穿鑿」を「毀滅者」と訳す。

[15]「引言」（前掲）で、「栄児」について魯迅は次のように言う。

「少女Robinettaは、私は長い間その意味が分からず、音訳しようと考えた。本月中旬、江紹原先生になんとか最後の調査を依頼し、数日後に返信があった。

『ROBINETTAという名前は、ウェブスター大辞典の人名録に収録されていません。私はそれがROBINと陰陽の関係ではないかと疑い、そのためまたROBINを調べ、以下の解釈を見ました。

ROBIN：ROBERTの親しい呼称、ROBERTの本来の字義は〈令名赫赫〉。』

それでは、良いだろう、『栄児』と訳す。」（「引言」、9頁）

[16]「引言」（前掲）で、「穿鑿」について魯迅は次のように言う。

「科学研究の冷酷な精霊Pleuzer、すなわち独訳Klauberは、本来もっともよいのは『挑剔者〔細かなことを厳しくせんさくする者〕』と訳すもので、挑とは選択することを言い、剔とはせんさくすることを言う。しかし陳源教授が『騒動を挑剔する』という妙語を造りだして以後、用いることを敬遠している。なぜなら恐らく《閑話》の指導力は大変偉大であって、この訳語もいきなり『挑発』であると解釈されるだろうから。これを学者の別名とするならば、その行いは刀筆の吏と同じであり、そのためにまた重罪となる。それよりいっそのこと『穿鑿』と訳したほうが良い。」（「引言」、9頁）

[17]「引言」（前掲）で、魯迅は次のように分かりやすく言い直している。小さなヨハネスは、「困難な道にのぼった、この道は大きくて暗い都市に向かうものであり、この都市は人間性と彼らの悲痛の存在するところである。」（「引言」、8頁）

[18] 夕方の、西の空に現れる太陽に続く黄金の雲の門は、黄金の洞窟の入り口は、第14章の記述からすると、太陽へ回帰する入り口であったと思われる。旋児と「死」とが同舟し、黄金の門に向かう。ゆえにそれは、太陽への回帰で、ヨハネスのすべての疑問が解消する道でもあり、同時に「死」と同行するヨハネスの死をも意味する道であると思われる。この黄金の雲の門は、第1章から現れ、第2章、第4章、第9章にも現れ、最終章の第14章に現れて、クライマックスとなる。そして動物や植物の死が話題となったり（第1章）、生き物の死、蛍の婚約者、若いコガネムシ等の虫たちの死として（第2、4章）、枯れる植物の死として（第7章）、首から血を流す野ウサギ（第10章）、きらびやかに踊る女性等の、人間の死と遺骸の参観（第11章）、また父の死として（第13章）現れている。

[19]『孟子』（金谷治、『新訂中国古典選』第5巻、朝日新聞社、1966・6・1）の「離婁篇　第四」の「百一」に、「孟子曰。大人者。不失其赤子之心者也。孟子曰わく『大人とはその赤子の心を失わざる者なり。』（中略）赤子の心を（中略）、恐らく、大(すぐ)れた人の心の純一さ、あるいは親を慕う孝心をいうもの、とみるのがよかろう。」

魯迅が「引言」で使用した意味は、児童の、幻想をも含みこんだ純真な心のありようと解釈する。

[20]「第5章　児童文学翻訳」（『二十世紀中国翻訳文学史　五四時期巻』、秦弓、百科文芸出版社、2009・1）は次のように指摘する。

「『小さなヨハネス』は一定の意味から言えば、選択に関する童話である――どのような生活態度を選択するのか、どのような生き方を選択するのか、どのような発展の展望を選択するのか。」（189頁）